1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390102087		
法人名	社会福祉法人 愛誠会		
事業所名	グループホーム八景水谷		
所在地	熊本市北区八景水谷1丁目5番1号		
自己評価作成日	R6年 12月1日	評価結果市町村受理日	令和7年5月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigosaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和6年1月30日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

交通アクセスのしやすい反面、リスクの高い立地条件となっているため、いかに過ごしやすい環境を提供できるか工夫をしている。玄関は安全対策として顔認証を導入し、防犯も含め安全面に配慮して環境を整えている。更にご本人が培ってきた、今までのライフスタイルを合わせたケアを提供し健康面に関しては、入院・治療の必要性が発生しても施設内での適切な医療を提供できるように医療との連携を密に行っている。また、ご本人の精神的負担や認知症の進行を防ぐ実践として、新たにユマニチュードケアの取り組みを行っている。各ユニットの特色として、菜の花ユニットは身体機能は維持できた方が多く、四つ葉ユニットの方は身体面と認知面のケアが中心となっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームの立地面に対するリスクを十分認識した安全対策と、職員の工夫により入居者がホーム内で如何に有意義に過ごすことができるかをその時々で検討し支援している。玄関に入ると家族の面会や入居者の休息場所にも活用されるスペースには、イベントや日常の光景を写した写真の掲示、電子ピアノや季節の飾り物が置かれていたり、職員が持ち寄った草花等から、ホッと和むことができる空間である。左右に配置されたユニットではお互いをお隣さんとして行き来し、掃除や洗濯たみ等と共に、生活リハビリにも繋がっている。医療依存の必要な入居者にも看護職員を中心に介護職員やかかりつけ医が連携を図り出来得る支援に取り組んでおり、殆どの家族がホームでの最終を望まれている。今後一人ひとりの思いに寄り添った支援に期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	検討部会にて理念の共有に努め実践に繋がるように行っている。	基本理念を＝皆様に＝「笑顔、感謝、思いやり」として入居者にホームを家、職員を家族と思って過ごしてもらうような関わりを心掛けるようにしている。理念は入職者や運営推進会議で地域へ向けて発信している。	職員は入居者自身もつ能力をできるだけ発揮してもらい、法人が進める“ユマニチュードケア”の基本となる考え方を支援に反映するようにしている。「見る、話す、触れる、立つ」等包括的なコミュニケーションはホームの理念にも通じており、機会あるごとに理念について振り返りの場を持たれることが期待される。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナウイルス流行により交流が減っている状態	管理者は地域との交流が難しかったとしており、近隣からの花の差し入れ等はあったものの、積極的な交流の機会はなかったようである。しかしながら9月には3日間にわたり中学生の福祉体験を受入れ、生徒たちとの手作りみこしにおそろいの法被姿で祭り気分を味わい、ひ孫のような生徒たちとの数日を楽しまれている。	近隣にある法人の小規模多機能事業所とは運営推進会議を合同で開催し互いの情報を共有しており、管理者は今後敬老会の行事や散歩等を一緒に行いたいとしている。地域のお隣さんとして互いに行き来し、相互交流につながる事を期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域運営推進委員の方へ認知症の方の実情や身体拘束について報告し、現在行っている支援を書面にて報告している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	地域運営推進会議を通し現状報告や課題を挙げて話し合う場を設けている。	現在会議は対面で行い小規模多機能事業所と合同で開催している。資料として添付した広報誌で入居者の日頃の様子を見てもらい、ホームの現状や事故報告、参加者との意見交換や要望等を受けている。家族からはお礼の他に感染症対策に面会の制限があった時期には再開を望む声や体を動かして欲しい(リハビリの要望)等があがっている。	会議には家族の参加が多く、毎回遠方よりバスを利用して来られる方もおられる。一方地域や包括等からの参加が毎回ではなかったり、少数であったり、せつかくの機会としては少々残念とも思える。地域自治会への加入等をきっかけに代表者の参加に繋がればと期待したい。また新年度初回の会議では改めて推進会議の意義について話をされることも良いと思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	現在できていない。	行政への事故報告についてはメールで対応し、リモートによる身体拘束、虐待防止に対する研修に職員が参加している。入居者の認定調査の際には管理者や計画作成担当者が立ち会い、居室での暮らしぶりを見てもらったうえで聞き取りに応じ、普段の状況を伝えるようにしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止委員会を設置し、学びの場を設け実践に活かせるように取り組んでいる。	身体拘束適正化委員会を設置し、職員の拘束への意識向上を図り研修の機会をもっている。夜間にのみ使用する人感センサーについては家族の同意のもとプランに入れて対応している。言葉遣いについては強く聞こえる時があるとして、勉強会で入居者が不安に感じたり萎縮されたりすることがないように、課題の一つとして共有している。職員への身体拘束や虐待のチェックリストを年1回実施する他、法人によるメンタルチェックは集計の後管理者に伝達され、個別に対応することとしている。	言葉遣いについてはテーマを設けて、毎回会議の課題とするなど検討されることを期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	会議やユニット会議等、学びの機会を設け細心の注意をし、防止に取り組んでいる。またユマニチュード習得チェックリストを行い分職員の質を分析している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	玄関先にパンフレットを準備し、他にもユニット会議、検討部会で時間を設け学び、活用できるように支援に努めている		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関する説明責任は果たしている。また改定の際は、書面で説明を行っている。遠方の方は郵送を行い電話で説明を行い理解を得た上で同意を頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	地域運営推進会議に参加して頂き意見を述べる機会を設けている。遠方の方や、なかなかお会いできない家族にはメールやラインでのやりとりをしている。	家族は運営推進会議や面会時に意見や要望を伝えられている。誤薬への苦情には直ぐに話し合いの場をもち、朝礼での確認や職員によるダブルチェック、マニュアルの見直しや日勤帯にはユニットのどちらかに看護職員が勤務に入るようシフトを組んでいる。入居者は職員に直接要望を話されるようであり、「今日お風呂に入りたい」「ジュースを飲みたい」等の言葉が聞かれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の検討部会や各ユニット会議などで意見や提案を聞き反映させている。各担当を明確にして検討部会で報告している。	法人職員がホームの現状や入居者の様子を把握するために来所しており、内部監察を各施設が持ち回りで行い、法人全体で質の向上を目指している。希望休や有休の取得については職員の意向を尊重し、働きやすい職場環境に取り組んでおり、管理者は職員自身が安定していることが入居者にも反映されるとしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤務に関しては希望休を取りやすくし、子育て支援等にも配慮している。向上心が保てるように各自の目標を把握し、職場環境を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の勉強会や認知症実践者研修や権利擁護研修への参加を推奨している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	上熊本拠点や本部での施設サービスの会議や外部の研修への参加をし、サービスの質の向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前に生活歴など情報交換をし、入居後不安なく過ごして頂けるように配慮し関係づくりに努めている。日々のケース記録や申し送りノート等を活用し、生活状況の中でより良い関係づくりを行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に相談を受け、情報交換を行い安心感を持って頂けるように配慮している。また病院からの入所の際は、病院でのカンファレンスや情報交換を行い、信頼関係を作っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスについては、遠方の家族も多く今年度は会議開催も出来ず、メールやライン、オンライン電話などを活用し、その時必要な支援を検討し対応を行った。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個々の利用者に応じた関りの中で関係の構築に努めている。ご家族の意向やご本人の言動を尊重している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	定期的施設内の取り組みや生活状況等を書面化して情報の共有を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	事業所の近所に住まわれていた方は、行きつけの美容室や行事参加しておられ馴染みの関係が継続できるように努めていたが、コロナ対策で機会が減少している。	家族の面会には個人差はあるものの入居者が楽しみにされており、現在は対面での支援が出来ている。昔からの知人等については家族の了承を得たうえで会ってもらうこととしている。干し柿づくりやプランターの花植え等には先人の手際の良さが生かされ、新聞読みを日々の日課としたり趣味の編み物でホーム用にコースター等を手作りされている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	レクリエーションやイベントを活用し、職員や利用者同士との馴染みの関係づくりを行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後も病院等との情報交換を行ったり、行政と連携し施設に戻れる場合は、その相談支援も行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人とコミュニケーション取りながら、不安や思い等を拾い上げ、家族から聞き取りを行いニーズを把握できるように努めている。	職員は入居者との普段の関わりから思いを汲み取り支援に反映しており、難しい場合には家族への聞き取りや生活歴から本人本位になるようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	一人ひとりの生活歴や環境を知り入居前までのサービスの経過等の情報を把握し生活の中に取り込んでいく。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の一日の過ごし方については、認知面の低下や周辺症状に合わせた残存機能を活かす場を設け、現状の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画含めお一人おひとりの現状を話し合いながら意見や工夫を行い改善をすることにより介護計画に反映している。	計画作成担当者は入居者、家族の意向をもとにプランを立案し、モニタリングには担当職員の声が反映されている。在宅時からの転倒リスクに入居直後から落ち着いた生活を送れることを掲げ、読書が好きなことから居室やホールでゆっくり個人の時間を楽しんでもらうようにしている。ホームでは家族の知らない入居者の以外な姿も見られるようで、人好き合いが苦手とっておられた家族が、他者と一緒に踊りを踊られる様子に驚かれる等、入居者の隠れた一面もホームでの生活の張りになるものと思われる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎月のユニット会議や検討部会、申し送りノート、業務日誌での情報交換により実践内容やプランの内容をその都度検討している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族のサービスに関しての要望が多様化している為、柔軟な支援に繋がるように努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域行事への参加や馴染みの美容室などの利用を行っている。その他にも熊日新聞や明治牛乳等の配達も活用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の往診や受診、訪問看護・リハによる支援もあり、医療面の充実を図っている。	現在3か所の医療機関による月2回の訪問診療を支援しており、薬の変更など何かあればケアマネジャーから家族へ報告されている。眼科や皮膚科等専門医受診は基本的にホームで支援し、結果を共有している。歯科は希望者のみ訪問により治療や口腔ケアが行われている。日々の健康管理は看護職員を中心に、バイタルチェックや食事、排せつ、月1回の体重測定等から異常の早期発見に努め、必要に応じた受診に繋げている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員や介護職員も同じ申し送りノートにて情報交換を行い連携を図っている。必要な受診などはかかりつけ医へ連絡し適切な医療を提供している。夜間も適切な指示が受けられる様にオンコールを導入している		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力体制を密に取りながら入退院時のサービス担当者会議などを通して病院関係者と関係づくりを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期については書面化し入居の際、家族の意向を確認している。また、必要に応じて再度確認を行い支援が出来るように努めている。	入居時に重度化・終末期支援に関するホームの取組を説明し、その時点での意向などを聞き取っている。家族の思いは変化するものであり、その後は定期的に確認する機会を持っている。現在殆どの方がホームでの最終を望まれているが、特養の申し込みをされている方もおられる。この1年で看取り支援は行なわれていないが、職員のメンタル面にも配慮した研修の機会を持ち、ホームの方針を共有している。	重度化され看取り支援の検討があがった方も、食欲が戻りホームでの生活を継続されている等、これまでの生活が本人にとって何よりの時間であったかが伝ってくる。今後も日頃の関わりを大切に支援の継続に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	看護師による緊急時の指導や急変時の対応などはユニット会議や検討部会で話し合いを行う。対応の仕方などは看護職員からの直接の指導もあり実践的に言い周知に努めた。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害対策に関しては、担当を決め消防訓練を自主訓練を2ヶ月に一回、総合的に年1回としている。防火訓練だけでなく防災も含め取り組んでいる。また避難確保計画の見直しを行った。	今年度は7月に自主訓練を、2回目を2月か3月で予定している。BCPについては策定後に職員間で共有されている。備蓄はホーム内に水、食料を供えている。日々の安全チェックに努めており、継続した取組に期待したい。	速やかな避難としては玄関のみという事であり、今後も定期的な訓練や消防署、行政の指導を受けながら有事に備えていかれる事を期待したい。運営推進会議を活用した訓練や防災業者の参加を依頼することも良いと思われる。また共有されているBCPの机上訓練に期待したい。備蓄については本体施設にホームの分がどの位確保されているか、リストをもとに把握しておくことが必要と思われる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけなどのコミュニケーションの取り方についても各ユニット会議や検討部会で問題がある場合は検討している。	入居者の尊厳やプライバシーに配慮した支援については会議などで共有を図っており、居室へ入る際はノックを徹底している。呼称は基本的に苗字としているが同姓者が多く、下の名前でも対応している。同性介助については家族からの要望は出されていないが、女性入居者には同姓での対応に努める。写真掲載など個人情報の使用については家族の承諾を得ており、職員の守秘義務についても周知を図っている。	呼称は同姓者が多いことから下の名前でも対応されていることを、全家族へも伝えておくことが望ましいと思われる。入居者を尊重した対応については会議などで共有が図られているが、今後は職員の接遇についてもチェックシート等を活用し、振り返りの機会を持たれることを期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	担当を決めニーズに合わせた細やかな対応が出来るように各委員会で検討しユニット会議や検討部会で再度問題提起を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	排泄も個別にて対応し食事形態や道具を活用し本人のペースで召し上がって頂くように配慮している。入浴についても希望に合わせて同性介助を実施している。更に日々の日計表で分析を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節に合わせた衣服の調整や化粧道具も揃え、お出かけの際は化粧をして出かけているが、今年度は中止している。施設内のイベントの際、ネイルやマッサージなども取り入れ対応をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備は朝食のみ事業所で準備している。好みや食事形態なども工夫しその方に合った内容を提供している。能力的に手伝いを希望され方に応じた後片付けなどをお願いしている。	朝食と三食のご飯のみホームで準備し、昼・夕の主・副菜などは系列施設で調理されたものを利用している。食形態は個々の嚥下力に応じてキザミやミキサー食で提供し、見守りや必要な介助が行われている。入居者が調理に関わる機会は持たれていないが、片付けなど本人の意向に沿ってできる事を手伝われている。	食事は入居者の楽しみであり、今後は定期的にクッキングの日を設けたり、手作りおやつの日などを検討されることも良いと思われる。取組に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士と連携し、その方に合わせた食事を提供している。食事・水分摂取量は日計表を活用している。更に体重増減に関しては測定を毎月行い、主治医へ報告しBMIにより食事量の制限や低栄養の場合の食事量の増量も検討している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きの励行を行い、定期的訪問歯科を導入し適切な治療及び助言を頂いている。個別の問題点は歯科衛生士から申し送りや書面での報告を受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄に関しては、その方の状態に合わせたケアを行っている。基本的にオムツ使用は控え、日中はトイレを使用して頂くように配慮している。	日中はトイレでの排泄支援に努めている。現在パットを併用しながらハビリパンツを使用される方が殆どであるが、布パンツで過ごされる方もおられる。臥床が中心になられた方はオムツを使用されており、プライバシーに配慮しながら交換を行っている。ポータブルトイレはトイレでの排泄が困難になった方や、夜間帯のみの使用される等個々に応じて対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量の把握により好みを把握し個別の飲み物を準備するなど工夫を行っている。また就寝前の水分補給もしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	本人の要望に合わせて対応している。入浴時の保湿クリームの塗布を行い保湿対策をしている。	週2～3回の入浴を午前・午後で、身体状況に応じ一般浴や機械浴で支援している。入浴後は殆どの方が、処方された保湿クリームを湿布されている。シャンプー等はホームで準備しているが、好みの品を個別で準備される方もおられる。季節湯(菖蒲・柚子)は入居者の楽しみになるよう継続して取り組まれている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々に合わせた生活習慣を大切に、ご自身の馴染みの枕や布団や毛布を準備してもらっている。就寝時間も個々に合わせている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護職員の管理と介護福祉士の連携により4重チェックを実施している。病状変化や内服が変わった際には記録や各ユニットにある申し送りノートを活用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	今年度は外出制限があり実施できていない。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご家族の協力で、外泊や外出をおこなっていた。	入居者の希望に沿った日常的な外出支援は立地面からも難しい状況にあり、家族の協力を得ながら実施している。面会時に近くの公園に出かけ弁当を食べて帰園されたり、自宅復帰も実現している。また、馴染みの美容室に出かける方もおられる。職員は感染症も落ち着いてきているため、花見を兼ねた散歩など取り組みたいとしている。	引き続き家族の協力や地域の花の開花、イベントの情報等を運営推進会議の中で収集し、入居者の外出の機会に繋げていかれる事を期待したい。また、外出の希望を発せられない方へも庭先で外気浴などの支援に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の希望もあり本人に持たせることでトラブルになる可能性もあり希望されない家族が多い。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を活用したり、メール、ライン、オンライン電話、写真付きの手紙などで支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	衛生面や安全面に配慮し、照明の調整や空調、室内温度などにも配慮している。季節毎の壁面づくりやお花を活けたり、飾ったりしている。	来訪者の相談や入居者の休憩にも使用されるロビーを中心に左右に配置されたユニットは「菜の花」「四つ葉」と命名されている。ロビーをはじめ各ユニットには季節の置物や入居者と職員と一緒に作成した掲示物は大判でパワーが感じられ入居者にとっても自信や励みに繋がっている。職員は自宅に咲いた草花や花木を持ち寄り、入居者と花名等の話をしながら飾るようにしている。コロナ5類移行後も掃除や換気、必要な消毒を徹底し、室温は入居者に応じて設定している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂と居間を分けており気の合う方同士で過ごして頂くよう配慮している。電子ピアノや両ユニットの多目的ホールでお話をしたり、歌を歌ったりして過ごして頂く、生活環境を整えている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの物(仏壇や位牌、専用のソファ、本・ぬいぐるみ等)を持ち込んで頂き、本人が安心して過ごして頂けるようにしている。	入居時に持ち込みの品は安全面から古い電化製品以外は自由であることを伝えている。テレビを置き好きな番組を楽しめる方や、あまり見られなくても自宅の雰囲気保てておりそのまま配置されている。家族の写真や仏壇は心の拠り所になっており、職員と仏壇に水は供える方もおられるようである。日記をつけたり小説を持参した方は居室やリビングホールで読まれるようである。昼食後もリビングで過ごしたり1時間ほど居室で寛ぐなど自由に過ごされており、それぞれの室温はその時々で設定している。	コロナ禍は家族が居室へ入る事は難しかったようであるが、これから来訪も増えていくと思われ、引き続き衣替え等を含め、一緒に居室環境の整備に努めていかれる事を期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリーであり、廊下の長さも確保されており自主訓練として散歩や歩行訓練等を行っている。家事支援として、掃除や洗濯干し、洗濯たたみ等を行い、今まで培った日々の暮らしの中の雰囲気に触れて頂いている。時には季節感のある料理(筍を使った)を行っている。		